

第20回アンパイアスクール 報告書

新潟県高等学校野球連盟審判部会
北支部 審判委員 近田 俊幸（報告者）、
佐藤 八十穂、渡辺 壮、柄澤 誠、大竹 彦司

- 期 日 令和元年11月30日（土）～12月1日（日）
- 会 場 J R 東日本硬式野球部柏グラウンド
- 講 師
一般財団法人全日本野球協会 B F J 中本 尚委員長、窪田 哲之（高野連審判規則委員長）、
小出 嘉則、山口 智久
一般社団法人 日本野球機構 N P B 友寄 正人審判長、77平林 岳技術委員（1日夜～）、
27森 健次郎、22津川 力、55岩下 健吾、
31長川 真也、50古賀 真之、51鈴木 宏基、
52山本 力仁

- モデルチーム 中央学院大学野球部
- 宿 舎 クリアビューホテル 千葉県野田市瀬戸548 TEL04-7138-2111
- 内 容 2人制メカニクス、他
- 受 講 者 79名（4班構成）
3班講師 岩下、窪田（1日目のみ）、古賀→佐藤、大竹
4班講師 友寄、長川→近田、渡辺、柄澤

●カルキュラム

☆第1日目

- 10:00～11:00 受付
- 11:00～11:10 開会挨拶・講師紹介・スケジュール説明
- 11:10～11:40 準備体操・GO-S TOP-CALL
- 11:40～12:10 ピボットの仕方とコーンドリル
- 12:10～12:40 球審の基本動作
- 12:40～13:10 一塁でのフォースプレイの見方
- 13:10～13:50 二人制メカニクス①走者なし（デモ）
・内野ゴロ・外野（ベース）ヒット・外野飛球
- 13:50～15:50 班別（4班）
- ◇（室内ブルペン）・投球の判定練習
- ◇（屋外ブルペン）・投球の判定練習
- ◇（フィールド）・二人制メカニクス⇒塁審、走者なし内野ゴロ、走者なし外野飛球
- ◇（フィールド）・二人制メカニクス⇒球審、走者なし内野ゴロ、走者なし外野飛球
- 18:00～21:00 座学
- 1. 講演 国際大会報告（講師 B F J 山口 智弘氏）
- 2. 講演 1年を振り返って（講師 N P B 森 健次郎氏）
（講師 N P B 津川 力氏）
- 3. 講演 二人制のポイント（講師 N P B 平林 岳氏）
- 4. 質疑応答

☆第2日目

- 8:20～9:00 準備運動・GO-S TOP-CALL

9:00～9:30 二人制メカニクス②走者1塁（デモ）

- ・外野（ベース）ヒットで1塁走者が3塁に向かうケース（ローテーション）
- ・外野飛球（A:右翼線、B左翼線）
- ・けん制、盗塁
- ・2盗塁時に打者が捕手の送球を妨害

9:30～12:10 班別（4班）

☆（室内）・走者一塁⇒ダブルプレイ、けん制、盗塁、送球妨害

☆（屋外ブルペン）・投球の判定練習

☆（フィールド）・二人制メカニクス⇒塁審、走者一塁外野ヒット、走者一塁外野飛球

☆（フィールド）・二人制メカニクス⇒球審、走者一塁外野ヒット、走者一塁外野飛球

13:00～13:50・（室内練習場）⇒抗議への対応、審判団の協議の仕方など

13:50～14:40・（フィールド）⇒キャンプゲーム

14:40～15:00・各班の受講者による総括演技

15:00～15:20・GO-S TOP-CALL（集中力養成ドリル）

15:20～15:40・閉講式

【講習会での気づき、講師からのアドバイス】

第1日目

○PUの構え方

回のはじめ、ワンモアピッチ（あと一球なげなさいという意味）。打者を呼び寄せる。

※ワンモアピッチの立ち位置は、どちら側に立つという決めプロではない。長川講師は、打者に声をかけるので、攻撃側に位置するようにしている。高校野球や軟式では、守備側に声をかけに行くのでそのままの位置にいる人が多いと思われる。

捕手が二塁に送球したら、ホームプレートに近づき、右打者ならマウンドに尻を向け、右足はホームプレート真ん中（あるいは右側）、左足は左バッターボックスの内側の線を踏まないようにバッターボックス内置き、プレートを掃いたら、左足を軸にターンしてセンター側に体を正対し、クロスオーバーステップ（顔は前を見たまま）捕手の右後ろに立ち正対、マスクを装着したのち、正規の審判が立つ位置に行く（この時もボールから目は離さない）。オンザラバーでプレイ（右手でダーツを投げるごとく、投手プレートに向けて指を差しながら発声する。このときに肘は伸びきらない方がキレイに見える）。※オンザラバー後は省略。ただ、気をつけたいのは慌てない。コールの後は必ずリラックスする。

◎PUは定位置にもどるまで気を抜かない。カバーして戻ってくる時も意識することが大事。また、止まったらボールに正対することを忘れない。

◎二人制は絶対的な約束事で、一・二塁はBUが、三・本塁の触塁はPUが確認する。

○ノーランナーのときでも、BUは四人制の時の一塁BUの位置でハンズオンニーズ。体はホームベースへ顔は投手へ。

○二人制で打球が放たれてすぐに動くのは選手の反応である。止まって、判断してプレイを読んでから動く。つまりポーズ、リード、リアクトである。

○二人制はBU主導。行くも行かないもBU次第。とはいっても、トラブルボールは行く。

①本塁打、エンタイトル・ツーベース（フェンスに当たるか当たらないか）

②複数の野手がボールに集まる

③フェア、フェール

④野手が著しく、激しくスタートする

その他、ひざ下の打球、風が強い場合などもゴー・アウトはある。いずれにしても、ゴー・アウトするかしないかはBUがキーを握っている。それにPUが合わせる。

○ランナー一塁、レフト線…アイブ・ガット・ボール→ラインに沿って三塁へ上がる。PUは止まってフェア（ノーボイス）or「ファール」と発声。三塁へ入るとき「アイブ・ガット・サード、アイブ・ガット・サード」。

◎BUのポーズ→一時停止、リード→読む、リアクト→反応を示す

打球が放たれたら、右足を一步引く（左足が大事。右足を引くことで、左のステップが大きくなる）。打球を追うより野手を見る（野手が教えてくれる）、とトラブルと判断したら左足を野手に向かって大きく踏み出す。「アイム・ゴーイング・アウト」OR「ゴー・アウト」。

①ゴー・アウトしないと決めたら、内野にピボットターン。走者より先行する。ターンをする位置はベースラインから1～2m奥のところ踏み込む。さらに、打球がレフト、センター、ライト方向へ行ったときにはそれぞれに違う。レフトは二塁ベースに近く、ライトは一塁ベースに近くなる。ターンした時に触塁やオブストラクションがないか確認、どこの塁でプレイが起きるかを読みつつターンをする。

◆打者走者が一塁まわり二塁に向かわず一塁へ帰塁したときは、打球に正対して顔で走者を確認しつつ、ミッドポイント（スリーフィートラインの始まりから一塁ベースの中間点）へ向けドロップステップして戻りのプレイに備える。プレイが一段落したら、走者一塁のBUの位置へ移動する。

※参考 ドロップステップ…向かう方向にある足を向かう方向に向けてステップすること。クロスオーバーステップ…逆に向かう方向とは逆方向の足をクロスさせて向かう方向にステップすること。

○フォース

BUの立ち位置は野手基準（一塁）2m位後ろ→一塁手のプレッシャーを受けず、ライナーのキャッチが見られるところ。但し、前進守備でもベースより3～4mより前へはでない。フェア・ファールを判定するのにベースに近づきすぎると正確な判定ができない。

無走者でもBUはハンズオンニーズ、体は打者、顔は投手。内野ゴロの場合左足からスタート90度に入り、一塁に正対し顔は打球へ、悪送球にならないと判断したらハンズオンニーズ。アウト、セーフのジャッジ。目はベースに置き一塁手の足と走者の足の見える位置にフォーカスする。判定は音で、打者走者のベースを踏む音と一塁手のミットにボールが入る音を聞き判定、もしくは全体像により判定する。捕球確認は、顔を大きく振らなくても捕球は確認できる。

スワイプタッグは一步外（その位の時間しかない。内に一步というのものもある）踏み出し、ダッグを確認する。

一塁ゴロで投手が一塁カバーに来た時は、線の一步内側が走者にも、投手にもぶつからない。大事なのは距離と角度。

セーフの時は二塁方向に向かいステップする→走者に先行するという意識を常に持つ。打球はホームからセンターの左側をPUが、右側をBUが判定する。BUはセンターより自分に向かってくる打球を受け持つ。打球が放たれたらリードステップをする。右足を引き一塁線に平行になる。ゴー・アウトすると決めたらリードステップをして左足から打球に向かう。この時に打球にあまり近づきすぎると、その打球が長打となりホームに戻る時に苦勞する。BUが「アイム・ゴーイング・ホーム」のケースは、無走者のときでゴー・アウトし、野手の手を離れるときでかつ発声は、ホームに間に合う時（一塁ベース付近で間に合うと思うとき）発声する。

○ランナー一塁、ライト線への打球→アイム・オン・ザ・ライン（PUは三塁へは行きませ

ん。走者は頼みます、の意味。)

◎一塁けん制、BUは右足をミッドポイントへ一歩踏み出し判定。

○BUはワーキングエリアを意識し、特に複数の走者を抱える場合は動き過ぎない。例えば、走者一塁でライト線、PUは「アイム・オン・ザ・ライン」、BUは三塁へ行き過ぎない。打者走者の一塁、二塁でのプレイにも備えるため、ワーキングエリア前線の間でプレイを読む。送球が転送されても、ワーキングエリアからは出ない。入りすぎると反対の走者に対応できない。但し、一塁走者が本塁に帰り走者が一人になればベースに近づくことは良い。

○PUはBUがゴー・アウトせず、ピボットターンして中に入ったとき（一塁でのオブストラクションにも気をつける）、打者走者が二塁へ行かないと判断した時には、BUはミッドポイントへ向かう。一塁でのプレイがない場合は走者一塁の定位置へ向かう。ボールに正対することを忘れない。

○ランダウンになったとき、一人ですべて見るとき「アイブ・ガット・オール」（一死一三塁、ファーストゴロ、ホームへ転送PUが一人で見るときに言う。BUは一塁走者、打者走者を見るために簡単に入ってはいけない。なお、ランダウンは走者から距離をとること）。

以前はハーフ&ハーフと言ってランダウンに参加したが、PUが一塁に上がっていく場合は「エンド」一塁ベースにすべり込んでくるものに対応するため、ファウルライン側から二塁一塁を結ぶところで待ち受ける。三本塁間も本塁で「エンド」待ち受ける。タグを見る位置。

○BUは一死、一二塁のときの内野ゴロダブルプレーのときのみ、ステップアップターンのあと、素早くセンターラインまで異動し（BUの立ち位置がショート側だから）、その後右足をミッドポイントへ向けながらアウトコール、ついで左足を一塁へ向けて踏み出し判定。

ショートへ転送セーフ（オフザバッグのとき）セーフし、一塁の判定後に、「セーフ、セーフ、オフザバッグ」と入れる。常にボールに正対する。フェイスザボール、チェストザボール→打球、打球、ときどき触塁のイメージ。

○BUはどの位置でもチェックスイングに応える。またPUの打者のブラインドとなる。スイング、キャッチ、ノーキャッチはBUからサインを送る（確実の時のみ）。キャッチ左手握りこぶしでひじ曲げ横に、ノーキャッチ左手人差し指延ばして地面に向ける。

○BUが中のときに、前進守備で野手のプレッシャーに感じるときでも、出来るだけワーキングエリアからは出ないようにする。

○走者なし、内野ゴロのときPUの動き

打球が放たれたら（例ショートゴロ）、マスクを取り右足を左足に寄せ（右でも左打者でも、フライでもゴロでも。その勢いで左足が素早く出られるし、初期加速も見た目もよい。PUが前に出るには意識して）、捕手の左側から出て45フィートまで上がる。i 打者の一塁手に対する妨害がないか、ii 野手からの悪送球に備える（iii送球が逸れてスワイプタグでBUが見えないときの補助もある）。BUが中に入るの、PUはファールエリアすべての責任を持つ。ボールデッドゾーンに入ったときには、「タイム、タイム（BUの同調）、ユー（間を空けると、BUがユーと言える）セカンドベース（BUがセカンドベース）」と右手で指示する。BUもエコーする。※ユーの間がきれいなエコーになる。

但し、セカンドのプレッシャーボール、ライトゴロに備える場合はBUが外にでるので、その時にはPUは中に入り走者を受け持つ。BUは外にいるのでファールエリアを受け持つので、ボールデッドゾーンに入ったときは、前段のPUが行うとおりに走者を進める。

また、三塁線へ打球（イージーや勢いのない打球）ではマスクを取り右足を左足に寄せ、捕手の左側から前に出て必ず止まってコールする（フェア、ファール、それから一塁側に行くのでこのときは45フィートまではいけない。）

○走者なし、イーजीフライのとき（レフト線からセンター、センターからライト線でBUゴー・アウトしない場合）

マスクの外し方、ステップの切り方は内野ゴロと同様。PUは打球に向かって行く。このとき、一塁、三塁を結ぶ線より前には行かない。なぜなら、ホームでのプレイに備えるには行き過ぎないことが大事（戻る際もウォッチザボールでPUリラックス地点まで来てボールに正対する）。野手が捕球する前には止まる。捕球を確認したら背中を向けているBUに「ザッツアキャッチ」とコールし、教えてやる。

◎コミュニケーションが重要なので、「アーム・ゴーイング・アウト」「OK」、「アーム・オン・ザ・ライン」「OK」、BUが本塁カバー「アーム・ゴーイング・ホーム」「OK」、声で確認しあう。

第2日目

○走者一塁でPUが三塁へ上がるケース

PUは、三塁へファールライン側2mくらいの位置を上がっていく。コーチボックスの始まりの位置（ライブラリーを目指して）。「アイブ・ガット・サード・イフヒーカムス」と発声しBUに伝える。BUは「OK」。二塁を走者が回った時に、三塁でプレイが起これないと判断した時はライブラリーから本塁の定位置に戻り本塁でのプレイに備える。BUに「アーム・ゴーイング・ホーム」と知らせる。BUは「OK」ですべての塁でのプレイに備える。

走者は二塁を回り、送球もその塁に投げられた時、走者、ボールの条件がそろったら「アイブ・ガット・サード、アイブ・ガット・サード」と言って中に入る。送球が来たならハンズオンニーズで待ち構え判定する。角度が悪くても必ず止まって判定。止まる意識が重要。

セーフの場合は本塁へ向かう意識が大事。一旦中に入ってしまったら、そのまま本塁に向かわなければならない。この時も、一塁や二塁でプレイが有り得るので、フェイスザボールで、止まったらボール正対。一塁や二塁に一旦行ってから本塁に転送される場合もあるが、その時は三塁に走者もいるので、横切ること三塁走者も前におけるがここが二人制の弱点でもあり、横切った時にボールから目が離れる、三塁走者との交錯も有り得るので、中で我慢する。プレイが一段落したときにボールに意識しながら横切りホームプレートに戻る。

内野ゴロの場合は二塁でアウトになってから一塁側に向かう。きっとこのときはライン上までは行けないだろうが、とにかく行くという意識が大事で、向かうことでボールデットや妨害等を目に入れることはできるし、見ているという印象も与えられる。一番悪いのはフリーズ（固まってしまう）すること。

BUは打球側の足を前に出すステップアップターン、フェイスザボール、そして打球に正対しつつも打者走者の一塁の触塁は顔を振って確認する。

上記以外

① アーム・オンザライン（打球ライト線に飛んだ場合）

PUは「アーム・オン・ザ・ライン」、BUは「OK」と発声しつつ打者走者の全ての塁について受け持つ（触塁も）。

② アイブ・ガット・ボール（打球がレフト線に飛んだ場合）

PUはアイブ・ガット・ボール、BUは「OK」ライン上を三塁に上がり、打球判定をするときにはしっかり止まって、そして一塁走者が三塁へ来るときは「アイブ・ガット・サード、アイブ・ガット・サード」と言って三塁で判定をする。

○けん制

BU、右足をミッドポイントへ一歩踏み出し止まる。PUはけん制されたら、右足をコーチボックス方向へ一歩踏み出す（悪送球に備える）。但し、実践では悪送球になる可能性より

投手のけん制が正しいかどうか見なければならぬので、慌ててマスクを外して目を切ることは注意しなければならない。

○けん制時は、PUは投手が投手板を外したのか、直接踏み出したのか非常に重要。ボールデッドゾーンに入ったときに進める塁が違うから。

○岩下講師から、オンザタッグはフォースの状態でない場合は入れない。「ヒズ・アウト」でよいと言われました。(フォースの状態のみオンザタッグ)

○ダブルプレイ

PUは三塁へ向かう。二塁がアウトになり三塁でプレイがないと判断した場合に一塁線へ出来るだけ早くもどり、打者の走塁、悪送球などに備える。

BUは、ステップアップターンで野手正対、野手が二塁に送球したなら二塁に正対、ピポットマンに送球されたとき顔は二塁ベースへ残したまま、右足をミッドポイントへ踏み出しアウトを確認した時は右手を足の方向と同様の方向に向け「ヒズ・アウト」コールをして、続いて左足を一塁ベースに向けて踏み出し判定をする{ヒズ・アウト、OR、セーフ}。万一、一塁走者の二塁での判定がオフザバッグのセーフの場合は、「セーフ」のコールのあと素早く一塁の判定に備え、判定をした後、二塁に向かってセーフで何故なのか「セーフ、セーフ、オフザバッグ」を入れる。また、ピポットマンへ転送時に落球はしているが投げ手変わっている場合は、「イツ・プッティング・アウト」と手を合わせて引く動作を2回ぐらいする。(この動作が大事)

※走者の進塁、戻しの時の発声は、進塁するときは、例「セカンドベース」とベースをつける。一塁へ戻す時は、「バック・トゥ・ファースト」とベースをつけない。

○盗塁時の打者のインターフェアランス。打者がかがむ、反対のバッターボックスへ逃げて捕手の送球の邪魔にならなかつたと判断した場合はナッシング(手を広げる)のシグナルを入れる。

打者の妨害→まずはストライク、ボールを見る。プロではスイングはノーボイスなので右手でストライクジャッジをした後、右手で場所を指しザッツ・インターフェアランスをコール。二塁セーフになった後、「タイム、タイム」打者に向かい「ザッツ・インターフェアランス」、「ユー・アウト」、一塁ランナーに「ユー・バック・トゥ・ファースト」。もちろんBUはエコー。で1-2のカウントで打者の妨害。同じくストライクのジェスチャー、二塁セーフ、「タイム、タイム、ザッツ・インターフェアランス、ユー・アウト」二塁ベースに向かって「ユー・アウト・トゥー」。BUもエコーで「ユー・アウト・トゥー」(アウトをお知らせ)していました。難しい英語はなく、現場で使えそうでした。インターナショナルは、アンパイアマニュアルのとおり英語でやっていました。

○球審が三塁へ上がったがホームに戻るとき「アーム・ゴーン・ホーム」はしっかり定位置(リラックスのポジション)まで帰ってくる。中途半端にならない。ライブラリー(三塁コーチャーボックスのホーム側角)で見ている、二三塁間でランダウンが始まってBUが見ていたらアーム・ゴーン・ホームでよい。

○妨害、ルール適用を誤ったら、もう一人が直す(勇気が必要)、サポートが必要。

○ランナー一塁、一塁二塁、満塁での3-2のボークは、特に投球がボールの時はノーカウントにならないので、しっかり見るのが重要である。

○集まって協議をしたら、最終決定。異議申立×。アウト、セーフ。ストライク、ボールは抗議権なし。警告を与えそれでも出てくるようなら「退場」を命じる。

○アウトをセーフに変えたなど、腹をくくって説明する。「アウトといったじゃないか?」「難しい判断でしたが、間違っていましたでしたがセーフです」。

○抗議は抗議権のあるものからは受け付けるが、その場合決して身振り手振りはしない。正

対するしっかり話は聴くが、おどおどしない。動きまわらない。抗議に来た監督等についていかない。待ち受ける。投球判定に対するベンチからの野次は、1 球目見逃す、2 球目ベンチに警告、3 球目「退場」

〈所感〉

毎回好評のアンパイアスクールですが、今回は告知から2～3日で定員まで達して締め切りになったということでした。私が申込した時にはすでに60番目でその日の夕方には満員になったようです。個人的には2年ぶりの講習会参加でしたが、過去のアンパイアスクールのレポートを参考にして、また今期は二人制にチャレンジしていましたので、本当に実のある講習会であったと実感しています。

敢えて厳しく報告させてもらいますが、「四人制もできないのに、二人制ができるはずがない」ではなく、「二人制ができないのに、四人制ができるわけがない」だと確信して帰ってきました。ぜひ、高校野球の練習ゲーム（もちろんお邪魔する高校のご理解があったうえですが）では、積極的に二人制をやって行きたいと思います。判定の機会、位置取り、何故かの意味などや声掛けの重要性が理解できると思います。さらなる自己研鑽と後輩指導のため積極的に活用させていただきます。

また、初日の夜に高野連の窪田審判規則委員長とお話をさせていただく機会を得ました。（翌日は高野連の竹中雅彦事務局長の葬儀に参列のために初日のみの参加でしたので、貴重な時間でした。）特に印象に残っているのは渡辺審判委員の「甲子園のレギュラー審判の方は、地区大会はしないのですか？」との問いに、「高野連に登録している高校の数は知ってるか？全国で高校野球球児は何人いると思う？」続けて「現在、加盟校は残念ながら4,000校を切ってしまったが、3,957校で部員数は143,867人（高野連令和元年度部員数統計参照）や。2,000校の思いを大事にしたいと思うとるんよ。何やと思う2,000校って？」「3年間（正味2年4か月）一生懸命野球に打ち込んできて、1勝も出来ずに終わる高校があるんよ。夏の選手権というのは一回も負けない高校が1校（優勝校）いる一方で、1回戦で負けるチームが約2,000校あるということ。同じ高校野球やで！その高校生の思いを考えたときに差があってはあかんと思うとるし、その気持ちを大事にして審判をせなあかんと思うとる。だから、甲子園やったら審判やる、地区大会の一回戦はしないなんていう審判委員は甲子園では使わんよ」。「この思いを全国の審判員にも大事にしてほしいと思うとるんよ。様々な団体の審判員がいて、それぞれの審判スタイルやジェスチャーがあってもいいと思うし、大いにその団体ではやればいい。でも高校野球の審判をやるときはFマークを高校生の思いを大事にしてほしいんよ。」「また、時間短縮（1試合2時間）も、無駄な時間をなくそうという意味であって、何でもかんでも早くせい！というわけやないで。例えば、打撃が終わって走ったばかりの投手にすぐマウンドについて早よ準備投球しろ。とか、チーム事情で急に代打ということもあるやろ。そんなとき慌てて手袋して、息を切らしバッターボックスに来たら、早よバッターボックスに入れ！なんて言わんやろ、息を整えせる。バットを振らせる。そんな時間を与えるやろ！2,000校の思い、部員の2年4か月の思いを理解してたら、審判委員（人）として当然の事やと思うで」。渡辺審判委員は、一気に窪田審判規則委員長のファンになりました。

最後に、参加にあたりご支援いただきました新潟県高等学校野球連盟をはじめ審判委員の皆様へ感謝申し上げ報告とさせていただきます。